

## ハビャン・ビシャリアル・ニーナ



アンナ・ツィマ著、阿部賢一、須藤輝彦訳

シブヤで目覚めて

河出書房新社、2021 年

アンナ・ツィマの処女作である『シブヤで目覚めて』を一言で表現すれば、「新鮮さ」ではないだろうか。その理由としていくつか考えられる。最も重要なのは、チェコ語で書かれた、チェコ人の物語である本作品が読者に日本文学の世界を開くことだ。読者は独特なユーモアを持つヤナという主人公にまつわる話を読むことになるが、彼女自身の物語と同様に大切なのは、彼女の日本文学への興味と、日本文学という枠組みを通して現れてくる文学研究と文学理論の世界である。文学をテーマにする文学作品に惹かれるのは文学研究者くらいしかいないと思われるかもしれないが、ヤナの世界は様々な読者を魅了し、引き込む。

『シブヤで目覚めて』ではプラハのカレル大学哲学部日文学専攻在学中の大学院生ヤナの話が語られる一方、ヤナ自身の世界より広大な世界も提示される。プラハを舞台にした章とシブヤを舞台にした章がほぼ交互に置かれるという二重構造から、異なる空間・時間を読者に提示している。プラハの章では、24歳のヤナの日本文学研究への最初の歩みが記録される一方、シブヤの章では、ヤナのもつ日本に残りたいという強い気持ちが生んだ17歳の彼女の分身の話が語られる。二人のヤナの存在とその繋がりとは小説の中心的な位置を占め、多層的な構造を作り上げている。

ただ、本作品の構造に不可欠な要素はヤナ一人だけではない。ヤナの周囲の人々も重要である。なぜなら、親友のクリスティーナ、雅知子、クリーム等の背景がヤナ同様に綿密に創造されており、読者はヤナの物語を読むと同時に、ヤナの周囲の世界も体験することになるからである。例えば、冒頭のページでは、ヤナは自分のことだけを語るのではなく、親しい友人であるクリスティーナの趣味と家族の事情にも触れている。このように、読者が小説を開いて最初に読むのは、主人公の視点から語られる周囲の世界とそこに登場する人々なのだ。

上述の通り、読者はヤナを通じてプラハ・シブヤという二つの世界を体験するが、それぞれの

描写は彼女の個性的な性格とユーモアのおかげで楽しいものになっているため、物語の展開を期待しつつ読み進めるのは容易だ。カレル大学の大学院生であるヤナは、暇な時に日本文学の翻訳を行い、文学理論、とりわけバルト及びトドロフの勉強を進めるが、その没頭ぶりに読者は引き込まれ、ヤナが惹かれている川下清丸（架空の日本人作家）の生涯をミステリー小説のように読み進める。日本の大衆文化の他、日本の映画と文学に言及する間テキスト性も本小説に不可欠な要素の一つであるように思われ、この理解が作品の受容にも影響するのではないだろうか。

一方、シブヤの章は、ヤナの想いから生まれてきた、渋谷に閉じ込められた分身たる 17 歳のヤナの話である。こちらの話は、確かに舞台として 21 世紀の渋谷を扱うが、主人公は誰にも見えない、幽霊のような存在として渋谷から出ていけない。その結果、渋谷の章はプラハの章とは異なり、ある種のファンタジー小説のように読める。ところが、外国旅行か留学を体験した読者にとっては現実から遊離していない作品にも思えるかもしれない。生まれ育った国とは違う世界を初めて体験すれば、遠く離れた未知の世界は、旅人、あるいは留学生の新しいリアリティとなり、その現実にもみ存在するもう一つの自分が作り上げられるのは不可避なことであるように思われる。このように、ある作家の背景を探偵のように研究する主人公というミステリーの要素と、渋谷に閉じ込められる不可視の主人公という超現実的な特徴、つまりファンタジーの特徴をも併せ持つ本作品は、現実を超える側面を含みながらも現実と密接に関わっており、主人公と似たような経験を持つ読者にはこれまでは表現し難かった感情を言葉にしてくれているように感じられるだろう。

また、日本とチェコを舞台にして、文学と翻訳をテーマにする本作を日本語訳で読むことによって、この小説に新たな、そして有意義な側面を与えることも特筆すべき点だ。日本語そのものを扱う本作を日本語に訳すことにより作品の自己言及と自己認識というメタフィクション小説の要素が強くなるだけでなく、この小説では架空の作家の作品を主人公が日本語からチェコ語に訳しているが、その作品内作品が邦訳版では「再び」日本語に訳されることにより、日本文学とチェコ文学、日本語とチェコ語の境界が溶かされると考えられる。

さらに、本作品は小説の理論と、小説を書くことがどれほど有意義であるかが語られる小説であるため、作品の二重構造にはいくつかの側面があるように思われる。この二重構造にはシブヤとプラハという二つの舞台という面と、文学をテーマにする文学作品というメタ的な面があるが、ヤナが読み、チェコ語に訳している川下清丸の小説も新しい一面を与えているのではないだろうか。川下の小説が小説内小説として存在していることで、本作品の二重構造には実際、少なくとも二つの小説が入っている。その結果、『シブヤで目覚めて』は様々な対立の小説であると言える。主人公の分身、チェコと日本という舞台、枠物語と枠内物語等は対立の世界を作り出すが、その対立の真ん中に位置しているのはヤナ自身である。そのため、ヤナという存在は対立の世界をつなげる役割、その架け橋を担っている。読者はヤナの話を読みながら、川下という日本作家と、彼の小説の登場人物の世界、つまり小説内小説の世界と馴染んでいけるのだ。

対立の一つとして、二つの舞台、要するにチェコと日本という場所の対立をあげたが、それをより広く捉えれば、欧州とアジアと言い換えることもでき、その異なる二つの地域の関係と繋が

りも様々な形で出現する。例えば、日本文学を研究するチェコ人の物語だけでなく、ヤナが読んでいる川下の小説には欧州を旅行する父親の姿が描かれ、のちにこの川下の小説は彼の実体験に基づいたものだったと明かされるのだ。そのためヤナと日本、そして日本の作家である川下と欧州の関係は、両方の物語の展開にも大きく影響している。また、プラハ在住のヤナの物語には、スリランカに逃亡するクリスティーナの父親が登場する。欧州、あるいはアジアへ旅する登場人物は、以前いた世界を去り、自分の家族を捨てるが、プラハとシブヤにいるヤナの課題は二つの世界の架け橋になるということであるため、その遠く離れている地域が実際はどれほど密接につながっており、関わっているかを小説の物語を通して実感することになる。このように、日本文学に惹かれるヤナを語る本作品が読者に伝えているのは、チェコと日本、チェコ文学と日本文学というのは実際には対立物ではなく、密接につながっているものだということである。

同様の現象は、20世紀後半に東欧を訪問した日本作家の紀行文でも見られる。安部公房、島尾敏雄と埴谷雄高の紀行文から読みとれるように、彼らは東欧を文学及び映画を通して知り、魅了されてから東欧の国々を旅行することになるが、安部公房が紀行文『東欧に行くーハンガリア問題の背景』において書いているように、チェコスロヴァキアにいるのは自分の分身であり、自分の本物はまだ日本にいたのである。その結果、旅行というのは母国との対談の機会であり、母国をよりよく理解できるための措置であると安部は考えている。こうして東欧を訪問した日本作家はその体験に力付けられ、1950～60年代における日本文学の新しい方向への発展に貢献したと言える。ヤナが作品中の日本とチェコの架け橋であるのに似て、東欧の芸術に惹かれ、東欧の国々を訪問した日本作家は、東欧と日本の実在する架け橋になったと言えるだろう。

『シブヤで目覚めて』は、外国の作家が日本を取り扱った初めての作品ではない。しかし日本を旅行し、その体験を元にした作品が多く存在する中、アンナ・ツィマの小説は単に「日本を体験する」主人公を語るのではなく、日本文学の翻訳を試みている人物を主人公とすることで、日本文学及び日本語という言語自体を主なテーマにしていると言える。その結果、チェコと日本を舞台にする本作品は両国の読者にとって非常に新鮮な小説である。作者のアンナ・ツィマは、自身の興味であり、専門でもある日本文学をミステリーとファンタジーの物語に変身させ、それを世界中の読者に興味深く紹介する試みに成功している。物語の随所に主人公のユーモアが溢れているため、文学の専門的な用語や文学理論に詳しくない読者でも楽しく読めるような作品になっていると言える。『シブヤで目覚めて』は日本文学と文学理論というような、文学作品ではあまり触れられていない物語を語るからこそ、読者を魅了し新しい世界を開く可能性があるのではないだろうか。

#### 注

1. 安部公房『東欧に行くーハンガリア問題の背景』講談社、1957年、14頁